さようなら、私の夢

So Long, My Dear Dream

この掌編はメインコミュ第四十四話（桜守歌織二曲目）実装後に執筆を開始した。
その時点では千早のソロ曲一曲目にどの曲が来るかは不明であった。
そのため、ゲーム本編とは整合しない物語であることをご了承いただきたい。
なお、このような断り書きで言うまでもなく、本叢書の物語はいずれもゲーム本編と関わりを持たない。

1　都内某音楽教室

C–G–C。子どもたちがお辞儀をする。いつもと同じ、レッスンの終わり。しかし今日は汗ばむ指が鍵盤を滑らぬよう意識が必要だった。

生徒らはみな小学生、ほとんどが低学年だ。賑やかしくおしゃべりをしながら、迎えの親とともに宵闇（よいやみ）落ちる街へと去っていく。簡単な挨拶を交わし、次回の連絡をし、見送りの時間はパタパタと過ぎていく。

「じゃあね、先生！」教室のドアを最後に抜けるのは、いつもどおり、四年生で最年長の男の子だ。ほど近い家まで、今年から迎えはない。後輩たちを見送ったのち、スニーカーの紐を丁寧に締め直して、元気のいい挨拶とともに駆け去っていく——ただし、今日はもう一声、「……お姉ちゃんも、さよなら！　今度は一緒に歌おうね！」

ドアが閉まる。そう、今日はまだ一人、この教室に残っている。

見送りの視線を室内へと移す。彼女は最後まで男の子に手を振っていたのだろう、少し寂しげな笑顔で、静かに右腕を下ろしているところだった。「先生。今日は本当に、ありがとうございました」

「いえ、いえ。そんな――」深々とお辞儀をされて、どぎまぎとしてしまう。年齢で言えば、自分の方が二倍も長く生きているはずなのだが。「大したお構いもできずに……あの、こんなもので良かったのですか？　いつもどおりのレッスンをお見せしただけなのですけれど」

「はい。とても勉強になりました」浅く、しかし力強い頷きとともに、言葉。嘘偽りのない真っ直ぐな響き、真っ直ぐな視線。この人は嘘というものを吐くことがあるのだろうかと思わされる――他人に対しても、自分自身に対しても。「歌を教えること、歌う喜びを伝えること。とても難しくて、私にはまだまだ出来ないこと

ばかりです。ご無理を言ってしまいましたが、見学させていただいて本当に良かったと思います」

何を仰るの。私なんかは、この街に何人もいる個人教室の講師に過ぎないのよ。貴女の方が、何万人もの人々をその歌声で魅了する貴女の方が、よほど――。

浮かんだ言葉は、どれも、気持ちを偽る言葉ではない。

けれども。

この言葉は本当に偽りのないもの？　この気持ちは、自分を偽ったものではないと言い切れる？

自分の歌声が世界を変えられると信じていた日々。その終わりに味わった挫折は、本当は、何も終わらせてはいなかったのではないか。

真っ直ぐな視線。沈黙が奏でる嘘偽りのない響き。孤高の歌姫という呼び名の意味を、今こそ理解する。それは孤独の対極なのだ。

手に滲んでいた汗はいつしか引いていた。如月千早の瞳を真っ直ぐに見据える。

「また、いつでもいらっしゃい。あの子との約束も果たさなければ、ね？」

＊

ビルの階段を降りると、既にそこは夜の街だった。

雑踏の声に思わず立ちすくむ。無力感に打ちひしがれている暇はない、そう思いつつも、続く一歩を踏み出せない。

きらきらと輝く子どもたちの笑顔、そのどれもが美しかった。けれど、千早の目にはどれも、同じように美しいとしか映らなかった。

一つひとつの輝きの、それぞれに異なる小さな翳（かげ）り。それぞれを見分けて、適切な言葉をかけていく。今の自分には絶対にできないことだと、素直に思う。

空を見上げる。街の灯りと月明かりとで、星は見えない。

人を見るということ。たったそれだけのことを、自分がいかに疎んじてきたか。千早は痛感する。見守られていることに甘えきったままで。

それでもこの痛みは成長の証でもあるのだ——自分へと言い聞かせる、半ば無理矢理に。

いずれにせよ、今は、歩みを進めなければならない。

一歩を踏み出した千早は、ふと、立ち止まった。内なる痛みとはまったく異質な、嫌な感覚にとらわれて。肌理（きめ）にまとわりついて浸透し、胸の内へ分け入ってくるような——。

周りを見渡すが、足早に帰路を辿る人々や、夜の楽しみへと騒々しく繰り出す人々の姿が見えるばかりだった。

＊

眉間に浅い皺を寄せて、如月千早が音楽教室のある駅前ビルを立ち去っていく。

2　都内某中華料理店個室

「千早が音楽教室に通ってる？」炒飯（チャーハン）を飲み下して聞き返す。米粒が際立つ食感は流石、一流店のものだが、多少、香辛料が効きすぎているのではないかと思う。「そんなネタでわざわざ呼び出したんですか？　彼女がオフでも自主練に励んでいることくらいファンなら誰だって予想できるでしょう」

「や、ちょっと説明不足でしたな。レッスンを受けているわけではないし通っているというのも不正確だ」二十年ものだとかいう紹興酒をちびりとやり、それにしたって、と言葉を続ける。「旦那、意外と健啖家なんですなあ。体重はずいぶんと軽かったように思うんですがね。いや、若いとはいいことだ」

「ここ最近、訳あって胃袋を拡張されていますのでね」ワタリガニの腹を割りながら答える。ぞんざいな口調にならないよう気を使ったものの、柔道黒帯の腕前で

投げられた痛みは否が応にも背中によみがえる。「そんなことよりも、千早のことです。思わせぶりな言い方は止めにしませんか。正直なところ、俺はあなたとこうして卓を挟んでいたくない」

はは、と乾いた笑いを飛ばしてから、渋澤記者は頭を掻いた。「嫌われたもんだ。ま、あたしのしたことを考えれば仕方ありませんな。よござんす、まずは事実だけ簡単にお伝えしましょう。ここ一か月、如月千早は都内の音楽教室を巡り歩いとります。主に子ども向けの個人教室に、自分で見学を申し入れて、ね」

麻婆豆腐をすくう手が、流石に止まる。「……何で、また？」

「それを知りたくてお呼び出ししたようなものなんですがね」蒸し鶏を紹興酒で流し込み、「どうなんです、最近の彼女、劇場（シアター）では？」

情報提供する義理はないと思うが、そもそも思い当たる節もない。むしろ39プロジェクトの発足以来、如月千早は以前のような不安定さをずいぶんと解消したよう

に思う。競い合う仲間たち、歌うことのできる舞台（ステージ）。彼女はかけがえのない居場所を得たのだ。

居場所（ホーム）。不意の渇きを覚えたプロデューサーは温かい烏龍茶を口に含む。詮無い想いではあるが、自分という存在では千早の支えになり切れなかったのだなと、ほのかな苦味を舌に感じる。「何もありませんよ。いつもどおり、よくやってます」

「ま、何かあるといって表に出すような娘（こ）じゃあねえでしょうな」グラスを片手に身を乗り出す。「思い出してみてくだせえ。一か月前。何かありませんでしたか？」

「ですから何も――あっ」やたらと密度の濃いアジェンダを倒（さか）めくりする、イメージの中の手がふと止まり、顔の緊張をわずかに緩ませる。「分かりましたよ、一か月前。そうだ、何も心配するようなことじゃありません。ちょうどその頃、彼女、歌織さんのセンター公演に参加したんです」

「桜守閣下のお嬢さんですな」含みのある表情で幾度かうなずいてみせる。「あのスカウト劇。政治家のスキャンダルを追っかけるようになったあたしが、７６５プロの評判を久しぶりに聞いたきっかけでさ。国防族のセンセイ方に激震が走ったんですぜ。芸能界にはよほどの命知らずがいたもんだとね」

「それはどうも……いや、ちょっと、あの、歌織さんのお父さんって」

「その話は置いときやしょう。桜守歌織の新曲披露がきっかけだったとして、それで心配がなくなるってえのはどういう理屈で？」

足元に爆薬を置いておかれても困ってしまうのだが。「いや、ですからね……レッスンからずっと、一緒だったんですよ。それで、歌織さんの経歴の話も出て。音楽教室の先生をしていたと、それで、たぶん……」

険しい顔をつくる渋澤記者を前に、言葉が淀む。それで、たぶん、何だというのだ。音楽教室がどういうものか興味を持った？　それでオフの時間を潰して見学に

回っている？

　他の誰ならいざ知らず、あの千早が？

「あの如月千早が――」椅子に深く身を預けながら、渋澤記者が重苦しく、プロデューサーの思考をなぞる。「――自分の歌を磨くための時間を興味本位で他に費やすなんざ、あたしにゃ到底、考えられねえ。

「いいですかい、旦那。あたしゃ、あのライブの場に居たんだ。黒井社長に文句の一つも言ってやろうかと――いや、お為ごかしはなしにしやす。黒井の旦那からもうひとせびりできやしねえかと思って、足を運んだだけだったんですがね。ですが、そこで、あの場で、聴いたんだ。今じゃ伝説にもなってる《眠り姫》を。あの時の会場がどんなだったか、言うまでもないでしょう？

「別に、自分が改心をしたとは思っとりません。芸能ゴシップが無価値なもんだなんて、今でもさらさら、思っちゃいねえ。人間の愉しみにキレイもキタナイも

ねえ。そんな区別を付けるのは傲慢チキな話だと……しかしですよ、この世の中にゃ、確かにあるんですよ。たとえ百万の人間の愉しみと引き換えにできると言って、それでも、絶対に奪い取っちゃいけねえような何かが。たった一人の人間が、ちっぽけでか細い人間がですよ、短いも長いもねえ、与えられた時間のすべてを賭して、そうやって磨き上げた何かは、輝きは、おいそれと失われていいもんじゃあねえんだ」

ほとんど一息で言い切ると、グラスを空けて息を吐き、「ま、こんなこと、旦那には言うまでもないことだとは思いやすがね」

「いや、とんでもない。俺は千早のプロデュースをしていて、そんなふうに思ったことはありませんでしたよ」半ば面食らったまま、思うところを正直に打ち明ける。「千早の歌には確かな輝きがあります。けど、それを何かと天秤に掛けたりしたことはありません。俺はただ……俺が彼女のプロデュースに必死になれるのは、

ただ、彼女の歌が、いや、それよりもずっと、歌を歌っている彼女が好きだからだと――うわっ、大丈夫ですか？」

手酌で継ぎ足した二十年ものを相手に、渋澤記者は盛大にむせていた。「……旦那！　旦那は大物なんですか、それともただのバカなんですかね!?」

「は？　はあ……似たようなことを劇場（シアター）でもよく聞かれますが」

「……いや、よござんす。今のは聞かなかったことにしときますよ、こちらも言ってませんでしたからね、そろそろ芸能記事に戻ろうと思っとるんです」卓上に折り畳まれた布巾を手に取り口元を拭いながら、「今日の払いも気にせんで結構ですよ。都議会のとあるセンセイにセッティングしてもらったんですわ、もう一息まで詰め寄った浮気ネタと引き換えにしてね。政界スキャンダルを追いかけるのも楽しくはありやしたが、自分より薄汚い尻をいつまでも追いかけていたくはありやせん。政治ネタはこれで全部ご破算で願いましては悪徳記者の返り咲きというわけで」

そうですか、と間抜けな返答しかしようもない。

「ま、この先また色々ご厄介をお掛けする訳ですが」しかしですよ、と真顔で言葉をつなぐ。「復帰の祝儀に如月千早の引退記事を書かせるような真似だけは、旦那、どうかなさらんようにお願いしますよ」

3　都内某レコーディング・スタジオ

舞台（ステージ）に立つ歌姫とはまた異なる千早の姿。記憶に残すことと、記録に残すこと。心構えとしてどのように違うのか、所詮は第三者でしかないプロデューサーには分からない内面世界だ。ただ、その両方の表情を間近で見られることは、間違いなく役得のひとつだろうと素直に思う。

常ならば。

「何か、不安なことでもあるのかな」言葉と同時に安っぽい芳しさが届き、意識の淀みを覚ます。紙コップのインスタントコーヒーを手渡してきたのは、これまで何度も千早のレコーディングを手がけてもらったエンジニアだ。「わざわざ様子を見に来るとは、大所帯になってからは珍しいじゃないか？　しかしな、お姫さまが健気に頑張ってるのに、騎士（ナイト）のお前さんがそんな顔をしてちゃ世話もなかろう」

「はあ、どうも――いただきます」掛けられた言葉の方には返答のしようもなかった。「今日の千早、どうです？」

「悪くない」

素気ない言葉が最大級の賛辞であることをプロデューサーは知っている。「リテイク、だいぶ多いようですが」

「ああ。それも、ほとんど彼女の方から言い出してる」この場に程よく味気ない液体をすすって、満足げに頷いてみせる。「漠然とした不満とかそういうのじゃない。きちんと、明確に、意図をもっての要求だ。うちの若いもんにとっちゃ、いい勉強になるだろう」

ミキサーにかじりつく若者に目をやる。駆け出しながらスジはいいとこっそり評価を伝えられた若手エンジニアは、表情こそ窺えないものの、千早の歌声との格闘に懸命な様子だった。「ご厄介でなければいいのですが」

「とんでもない。世辞でも何でもないよ」くつくつと笑って、「あいつめ、今朝までガチガチに緊張してやがった。顔を見るなり思わず怒鳴りつけちまったよ。てめえ、まさかファンの気分で職場に立とうとしてんじゃねえだろうな、ってさ。しかし、ま、ロートルの言葉なんざ届きはしないもんさ。途中から来たお前さんは知らんだろうがね、いざや本人とご対面して、後でサインをとか抜かされたときには、怒る気力も失せてズッコケそうになったよ。それがどうだ、ほんの小一時間で一端のプロみたいな面になりやがった。期待通りと言えばその通りなんだが、感謝しかない」

一端の、プロ――プロフェッショナル。言葉の重みがコーヒーの苦味にかぶさる。「千早は間違いなくプロですからね」

頷く気配、コーヒーをすする音に続いて、わずかに眉をひそめる気配。「何だ、そうじゃないとでも言いたげだな？」

「え？　ああ、いや。そうではないんですが。ただ……」音楽教室巡りのことを話すべきかと、一瞬、悩む。しかし、それはノイズでしかないとも思う。心に巣食うわだかまりにとって、その端緒は、一旦は無関係だ。「ただ、千早のプロ意識って、どんな形なのかな、と。如月千早が生きてあることが、歌と切り離せないことは分かるんですが」

「そりゃあ……難問だ」ベテランが重苦しく息を吐く。「プロである以上、生きがいだとか情熱だとか、そういうものとはどこかで距離をとることも必要なときがある」

「はい。でも、彼女にそれが出来るとは思えない」

「それは、今の如月千早でも、かね？」

肯んじようとする言葉が、喉に詰まる。苦い温もりを流し込み、「もしかすると、俺がそう望んでいるだけなのかも知れません。歌以外の仕事を持ってきて、彼女の

世界を広げてやろうとしていながら、どこかで、そうなって欲しくないという気持ちが」

「フムン。それはそれで悪くないだろう。歌へ妥協しないイメージはアイドルとしての如月千早に欠かせないだろうからな」あえて職業人同士としての言葉を選んだ後、わずかに語調を変えて、「いずれにせよ、あまり悩むことでもないんじゃないかね。いや、悩みを抱えたままでも構わないと言うべきか。俺はお前さんのことも如月嬢のことも、十分、信頼してるよ。どうやったって正解なんざありゃしないんだ。悩みながら選び取った答えのとおりにプロデュースをすればいいのだし、彼女も自分の生きる道は、いずれ自分で選び取るだろうさ」

「……そうですね」コーヒーの味は、ただ苦い。

＊

千早の歩む道。その道をこうして共に歩いていることを、当たり前のように感じてはいなかったか。彼女には彼女の目指すべき場所があり、歩むべき道があるはずであるのに。

「今日はありがとうございます」まだ少し高揚の残る声で千早が言葉を紡ぐ。「お忙しいのにわざわざ様子を見に来て下さって。お仕事、大丈夫なんですか？」

「うん。心配することはないよ。今日は半分、オフみたいなものだったから」

「そうですか。少し、安心しました。私たちのプロデューサーにも、ちゃんと、そういう時間があるんですね」少しおどけたような口調の後、「あの。それこそ本当に、大丈夫だったのでしょうか。貴重なプライベートを私のために割いて下さって」

深刻な口調が妙に可笑しく、思わずくつくつと笑ってしまう。「――いや、すまない。急ぎの仕事が無いとは言っても、給料をもらう以上、遊んで回るわけにもいかないし。それに、歌っている千早を見られるのはプライベートな時間の有意義な使い方だと思うよ」

しばしの間の後、そう言っていただければ、と聞こえた声は、小さいだけでなく外方を向いて発せられたようだった。「と、とにかく。見に来て下さって安心できました。不安というわけでもなかったのですが、新しいミキサーさんとのお仕事でしたので」

「うん。サインをねだられたんだってね？」

「はい。とても殊勝な方で。自分は記憶ではなく記録に残す仕事だから、と。今日という日の記録が、何か一つ、どうしても欲しいとおっしゃって」

なるほど。若者なりの真面目さなのか、あるいは物は言いようということなの

か。真意のほどは知れないが、千早が前者として受け止められたのは、彼の仕事に向かう姿勢が真摯なものだったからこそなのだろう。

与えられた仕事に真摯に向かうこと――誰かに与えられた仕事ではなく、自分がこの世界に存在とともに与えられてある仕事に、真摯に向き合うこと。

詰まる所はそれしかないのであるし、それで良いのだろう。

「それでは、私はここで――プロデューサー？」

だからこそ、今、確かめておかなければならない。「千早。これからもアイドルを続けてくれるか？」

短い声とともに千早は目を丸くする。「もちろん、そのつもりですが。あの、それはどういう――？」

どういう意味なのか。あらためて問われると、答えに窮する。

気まずい沈黙を、千早は、自分なりに答えを見出すべき時間と捉えたようだっ

た。「そうですね……アイドルなのかボーカリストなのかと問われているのなら――今は、アイドルでありたいという気持ちが少しだけ強いかと」

「そうなのか？」

「はい。言っておきますけど、グラビアのお仕事がもっと欲しいとかそういう意味ではありませんから」

「いや、それは分かる。うん、いや、それについてはこちらから分かって欲しい部分も多分にあるんだけど」

「そのお話はまたいずれ」短く斬って捨てるような言い方の後、ゆっくりとコーヒーをかき混ぜるように、「私には歌うことしかない。いつかの私は、そんなふうに自分を限っていました。でも、今は、自分の可能性をもっと広く感じられます。それもプロデューサーのおかげかと。ありがとうございます」

「こちらこそ、ありがとう。これからもがんばろうな」心からの言葉だ。だが、

この程度の言葉しか出てこないのか。

千早が自身の成長を感じること。そして彼女自身から、その謝辞を得ること。それこそが――つまりは今この瞬間こそが、天職から得られる報いの時ではないのか。そしてそれ以上に、これからも―あるいは今しばらくは―千早の歩む道を共に歩んでいけること。それは、もっと、無窮の歓びであるはずではないのか。

プロデューサーの言葉に、芯の強さを伴う笑顔で肯んじる、如月千早。幸福な余韻を響かせた彼女は、ひとつ目を伏せ、息を吐いてから、「プロデューサー。実はひとつ、お渡ししたいものが。

「迷っていたんです、ご迷惑になるばかりではないかと。ですが、その……わ、私のためにお時間を使っていただくのは、その、苦痛ではないということですし。何より、今あらためてプロデューサーから頂いたたくさんのことを思って、少しでもご恩返しをしなければと思いまして。そうなるのかは分かりませんが、あの、お

時間が合うようでしたら、どうか、お願いします――では、今日はこれで」

少し早口で言い尽くし、お辞儀をして去っていく千早。立ち尽くすプロデューサーの手元に残された封筒には、彼女の通う学校の名前が判で捺されていた。

4　都内某高等学校講堂

「お、奇遇ですなあ、旦那！　どうぞ、特等席が空いてやすぜ！」

大声で手を振られては敵わない。流石に「765プロの旦那」と叫ばないだけの配慮はあるのだなと苦々しく思いながら、最前列の席に座る。「どうしてあなたがこんなところに……だいたい、良いんですか、こういう席は父兄の方が座るものでは」

「いやいや。地域住民の参観も大歓迎ということですし。皆々様がご遠慮なさるんなら、前から詰めて座る方がかえってご迷惑にならんというもんですよ」よくも言う。いくら我が子の晴れ舞台とはいえ、こんな風貌の男に居座られては、そうそう、隣に座る度胸のある親もないだろう。「それに、あたしはともかく、旦那は父兄みたいなもんでしょう」

「冗談でもやめて下さい。千早には千早の家族がある」そう言いながらも悪い気の起こらない自分が、つくづく嫌だ。「それよりも。あなたがここにいる理由の方です。芸能記事に復帰したと言っていましたが、今度は学校で孤立してる千早のネタでも書くつもりなんですか」

「旦那、それこそ冗談でも言っちゃいけませんぜ」何故か真面目な口調で叱られる。「心配せんでください。今日は仕事抜きで羽を伸ばしに来とります。如月千早が出る合唱大会ですぜ？　見逃す手はない」

「それはどうも。ですが、仮にも芸能記者なら公開されているセトリは確認しておくべきでしたね」不機嫌な思いが蒸し返されるのを感じながら、内ポケットから封筒を取り出し、中の紙片を開いて寄越す。「二年生のクラス対抗合唱大会、学園祭の最後を飾る花形イベント――千早は今日、歌わせてはもらえません」

あの日。事務所に戻り、封筒を開けたときのこと。千早が学校行事に招いてくれ

たことの、喜び。そして、裏面のプログラムを目にしたときの―ピアノ伴奏と並ぶ指揮者の欄に「如月千早」を見つけたときの―憤り。夜の出来事で良かったと思う。衝動的に学校へ電話をかけていたプロデューサーを鎮めたのは自動音声による応答だった。

それとても一時の衝動が鎮静されたに過ぎない。内側から鈍い痛みを感じてこめかみに親指をあてがう。「千早が学校で腫れ物扱いされていることくらいは、彼女の話から察していましたよ。でも、これはあんまりだ。どんな配慮が働いたにせよ、千早から、如月千早から、歌う機会を奪い取るなんて許されない」

「……そろそろ、始まるようですぜ」プログラムの紙を返しながら、渋澤記者が声を潜めて言う。「旦那、もっと彼女を信じてやって下さい。いや、旦那が信じるべきなのは旦那自身かもしれねえ。如月千早が自分から旦那を招いたんでしょう？なら、旦那にこそ見て欲しい何かが、今日この場にあるってことです」

「何があるって言うんですか。くちばしつけて指揮台に上るとでも」

「やめましょうや、キレ方が父兄どころかモンスターペアレントのそれですぜ」

放送部と思しき女生徒のアナウンスが聞こえてくるなか、渋澤記者は顔を寄せてささやく。「セトリの確認なら、当然、やってます。その上であたしは来て、そして、旦那が来た。旦那が来たから、あたしは確信したんです――今日という日は如月千早にとって大事な一日なんだとね。あたしは招かれざる客にすぎやせんが、旦那、どうかあなたはしっかり見届けてやって下さい」

言われなくても。粛々と始まった合唱大会を、なるべく思いが表れないよう無表情を努めて眺める。不機嫌な顔で最前列に座り、千早の思いを台無しにしたくはない。学校の中でも上手く立ち回れている姿を見届けてやらねばならない。そのためには、どれだけ腹立たしい茶番劇であろうと、進行を妨げるわけにはいかない。

セットリスト、もといプログラムどおりに、行事は規律正しく進んでいく。何十

周年かの記念で建てられたという講堂は、思いのほか音響が良い。このステージを借りて千早のソロライブを打つのも、あてつけとして悪くはないかもな、などと思う。

『――――指揮者は、如月千早さんです』

無の場所へ飛ばしていた意識に、アナウンスの最後の部分だけが届き、浮世へと引き戻される。背後では小さなざわめきが起こっている。そして正面では、すでにステージ上に整列した学友たちの前に、千早が、歩みを進め、立つ。

級長なのだろう、男子生徒の一人が号令をかけ、よろしくお願いします、と声を響す。千早の声も、その中に、ある。今日の彼女の声は、これと、最後にあるであろう、ありがとうございました、だけなのだな、と、――

不機嫌さに淀んでいた目が澄明を取り戻す。これまで視界の中を流れていったいくつかの集団とは明らかに様子が異なる。当事者意識や贔屓目のためではない、芸

能事務所に務める身分の客観的な感触だ。

その感触の分析には一瞬も要することはない。一目で明らかだ。

この生徒たちは指揮者を見ている。

千早の腕が優しく動き、ピアノが音取りのための一音を奏で、生徒たちが音を合わせる。その段になって、背後の客席の大部分にも、漠然とした感触が届いたようだった――何が起こっているかを既に理解しているプロデューサーにとっては、その音楽未満のハーモニーだけでも十分すぎる衝撃だった。

千早がいる。ここに、千早がいる。

歌うことと切り離してあることのできない彼女の存在が、ここに、確かにある。

合唱は驚くほど静かに始まった。コンサート会場などではない、音響の助けこそあれ小さなざわめきが止むことのない講堂に、その静かな歌声は薄い絹のような質感すら伴って広がっていく。楽典の勝利とも呼ぶべき時間が拍の刻みとともに現出

する。

この歌い出しにどれだけの苦労をかけたのか――いや、どれだけの苦労をかけさせたのだろうか。千早は。芸能活動に明け暮れて休みがちなこの女生徒が。

主題が始まる。所詮は素人の学生だ、奇跡の時間を手にしうるのは始まりの数瞬間だけだ。案の定、ソプラノがわずかに走る――いや、千早の手がそれを優しく制する。バスの支えが足りない――いや、千早の視線が奮起を促す。アルトが、テノールが、紡ぎだす糸を誤りそうになるその度に、千早の細く長い指が正しい一本を導き出す。

歌声がいっとき止み、伴奏の一音が余韻を響かせる中、級長が独唱する。それはもちろん、上手い歌ではない。誰だって彼をスカウトしたりはしないだろう。だが、指揮者を見つめ、指揮者を信じて、その想いに寄り添うように自分の内側にあるものをすべて細い咽喉から搾り出していくその行為を、誰もが歌と呼び、誰もが

音楽と呼ぶことだろう。

そして。四十人からの歌が、音楽が、如月千早が、講堂を包み込んだ。ざわめきもつぶやきも、しわぶき一つ聞こえない。定命の時間芸術は、やがて、静寂の中に還っていく。

「――旦那。旦那っ」

服の裾を引っ張られたプロデューサーは、自分が立ち上がって拍手をしていたことに気づき、慌てて腰を下ろした。恥ずかし紛れの咳払いをしつつ視線を上げると、すでに終わりの挨拶を終えていた千早が、苦笑しながら小さく、頷きを返した。

「まったく。しかし旦那、これで自信というものが少しは付いたのではねえですかい」そう言って含みを持たせるように顔を歪ませるが、もともと歪んだ顔ではどういう含みがあるのかも読み取り難い。「如月千早に家族があるのは確かとしてもですよ、旦那だって、立派な家族の一員だ」

直接に返事をすることはせず、ひとつ息を吐く。

そのとおりなのかもしれない。そうではないのかもしれない。腰を下ろす直前、客席を振り返ったとき目に飛び込んできた顔を、プロデューサーは思い起こしていた。

5　都内某公園

夜の空気はまだ汗ばむ蒸し暑さを含んでいるが、夜風は秋の涼しさと虫の音を心地よく伝えている。千早がゆったりと漕ぐブランコの、静かな鎖の軋みとともに。

「今日、千早によく似た人を見かけたよ。ひょっとして――」

「如月千種。母だと思います」千早の声はあくまで穏やかだった。「担任から聞かされました。来てくれていたと」

問いかけておきながら、言葉をつなげられない。そうか、と曖昧な言葉を投げかけると、千早は少し笑って、「お気にかけて下さってありがとうございます。ただ、今日のところは、まだ。今はひとつずつしか乗り越えられません。今日は、学校のみんなと。母とは、また、いずれ」

そうか。今度は確かな意図を込めて、そう答える。

「母を前にしては口汚い言葉しか出てこないと思います」千早がそう話し始めたのはしばしの沈黙の後であった。静けさの重みに耐えかねたというふうではない。ゆっくりと流れる夜の時間が彼女の心に深く染み入っている。「私は母を許せない――それは、私が母に許してもらえないと思うから。母が私を許してくれないことが、怖いから」

「お母さんが、千早を？」

「……私は歌うことしかしていなかった。後にも、先にも。そして、今、こうして自分の夢を叶えようとしている。母に全てを押し付けて。私は、母がどんな夢を抱いていたのか、それすら知らない。知ろうとすらしなかったんです」

「待ってくれ、千早。それは――」それは違う。思わずして鋭い語勢が口を衝いたが、見上げる千早の屈託のない笑顔が言葉を飲み込ませる。

「分かってます、母が私を恨んでなどいないことくらいは。でも、私は自分の中

の弱さを拭いきれません。母だけじゃなくて、人と向き合うことの怖さを、少しずつしか乗り越えられないんです」一番愛していた人のために、一番傷ついてしまったから——そう言い添える時には、流石に目を伏せ、か細く消え入りそうな声であった。それでも再び千早は顔を上げて、「今はもう少し、母に甘えていたいんです。母に——いえ、母の娘であることに。学校のみんなと学校で過ごせる時間はもうすぐ終わってしまいます。でも、私が娘であることのできる時間は、まだもう少しだけ、長く続いてくれると思うから」

そうか、と三度（みたび）。今度は言葉を探すためのつなぎに過ぎなかったが、プロデューサーとして返すべき言葉は一つしかないように思えた。「いつか、お母さんを劇場（シアター）に呼んであげような」

「……はい！」

「そしてトップアイドルになった千早を見てもらうんだ！」確信を込めた言葉が、

しかし、千早の顔から輝きを奪い去る。ほとんど虚ろな、洞穴のような顔。「……千早？」

「私でなくてもいいと思います」唇は動いている。胸郭もかすかに上下している。なのに、この声がどこから聞こえてくるのか、プロデューサーには分からない。「母に聴いてもらう歌は、私の歌でなくても」

「いや、だって……なあ、何を言ってるんだ？　お母さんに聴いてもらうのは千早の歌じゃなきゃ意味がないだろう？」

「私の歌……そうですね、私の歌も聴いて欲しいとは思います」千早の笑顔に、思わず、身を引く。遊具の上でゆらゆらと揺れる能面のような笑顔。「ですが、それよりも聴いて欲しいのは、私を追い抜いてトップアイドルになる誰かの歌です。とても楽しみです。私が母と向き合えるようになる頃には、きっと劇場（シアター）の誰かがトップアイドルになっているでしょうね。静香でしょうか？　それともジュリ

ア？　もしかしたら志保？　意外と矢吹さんだったりするのかも。ふふ、失言でした。意外なんてこと、少しもありませんよね。あんなにまっすぐ歌うことが好きな人、私は他に知りません」

急速な渇きに唾を飲む。この場から走り去りたい衝動を抑えつけるだけで精一杯だ。違う、こんなのは違う。これは、こいつは、千早ではない。

「私は一番に――トップアイドルになれなくてもいいんです」ブランコから降りるその体は重さを失ったようだった。近づいてくるその頭はほとんど上下せず夜風を切って滑るようだった。「今日の合唱、どうでしたか？　素晴らしかったですよね？　そうですよね？　プロデューサー、思わず立ち上がって拍手をしてくださいましたよね？　私はステージに立たなくても私の歌を届けられましたよね？　いつか、劇場（シアター）の誰かがトップアイドルとしてステージに立つとき、世界で一番きらびやかな舞台で歌うとき、そのときに私の歌が、ほんの少しでも、その中にきっと、

ちゃんとありますよね？」

違う。いや、何も違わない。今、自分の目の前には如月千早がいるのだ。自分がこの世界に存在とともに与えられてある仕事、プロデューサー。存在の全てを賭けて向き合うべき存在が、如月千早が、目の前にいるのだ。

「――千早」意を決して呼びかける。見知らぬ仮面の奥にあるはずの彼女に向けて。

その声に応えるように、千早の虚ろな目から涙があふれ、張り付いた薄ら笑いの頬を伝った。「プロデューサー。私に今も期待をかけて下さっていることにはとても感謝しています。それが五十二分の一の平等な期待であっても。でも、私は、駄目です。駄目なんです。私がトップアイドルになるなんて、絶対に、駄目なことです」

「どうして……」

「どうして？　どうして、ですか？」月明かりと街灯に照らされた笑い顔は微動だにしていない。だが、ただただ流れ落ちていく涙のかさは増し、その声にはわずかに感情の震えがある。「そんなの決まってるじゃないですか。私はずっと回り道ばかりしていた――アイドルのステージに立ちながら、アイドルであることを拒み続けていた。そのことはプロデューサーが一番よく分かっているはずです」

「ああ。たくさん苦労をかけさせられたからな。でも、楽しい時間でもあった」

「やめてください。私の独りよがりに寄り添うようなことは」

「俺はわがままに付き合っていたつもりなんかない。誰よりも歌に、歌うことに真剣に向き合っていた千早のそばで、少しでも支えになれればと思っていただけだ」

「その支えがあったからこそ、私はアイドルとしてここまで来れた――その支えなしにはどこへも辿り着けなかったはずです」

「でも、今、千早はここにいる。劇場をホームだと言ってくれたのは嘘なんかじゃないんだろう？　回り道をしたって、ここに辿り着けた。この場所でみんなと寄り添いながら競い合う、それでいいじゃないか？」

「駄目です。アイドルとしての舞台を与えられていながら、私は自分の歌ばかりにかまけていた。肚の底ではアイドルをバカにすらしていた。そんな私が劇場のみんなと寄り添うなんて、ましてや、競い合うなんて。もしもアイドルの神様がいるなら、私を選んだりは、絶対に――」

「そんな神様を信じることなんてない！」声を荒げたのは千早のためなどではない。嘘の仮面に塗り固められたその奥にある千早が見えない、そのもどかしさのためでしかなかった。「神様がなんだ！　俺はずっと、千早の傍で信じ続けてきたんだ、千早は絶対にトップアイドルになれると！　どこか遠い空の上からじゃない、一緒に回り道をしながら、ずっとだ！　その回り道があったからここまで来れ

たんじゃないか！　そのことは千早だって分かってるはずだろう、歌織さんとステージに立って……」

桜守歌織。その名前を口に出した瞬間、何か、もどかしさの一隅が晴れたように感じる。

千早の顔に張り付いた仮面が、軋んだ。「……ちがいます」

「違うって、何が」

「桜守さんは私とちがいます！」

「何が！　何が違うって言うんだ！」

「だって！　桜守さんには！　歌を聞いてくれる人が、ずっと――」

もどかしさが一瞬で晴れる。思わず、あっ、と声を上げる。

それと同時に。

千早の喉が、聞いたこともないような音を上げた。

悲鳴。いや、およそ命あるものから生まれた声とは思われない。

甲高い音響が夜空を震わせる。公園の木々の枝に憩いを求めていた鳥たちが、一斉に羽ばたき逃げ去っていく。

静かな夜の公園に響いたその音楽は、千早がこれまで奏でてきたものの中で、もっとも切なる願いに裏付けられたものであり、またもっとも虚しい結果をしか生まないものであったことだろう。

自分の言葉に怯えたように、眼を見開き、両手で口を塞ぎながら、千早は、放たれてしまった言葉を呑み込もうと、全力で息を吸ったのだ。

その音が途切れたとき。放たれた言葉を呑み込むことも、時間を巻き戻すことも、叶わないことなのだと知ったとき、千早は、今度こそ、大声で泣きじゃくりながら公園の土に膝をついた。

「ああ……」思わずして嘆息が漏れる。もどかしさは全て晴れた、それと同じく

して、そのもどかしさがずっと、自分の中に巣食っていた答えの得られないわだかまりであったことも、プロデューサーは知った。

千早はなぜ、音楽教室を巡り歩いていたのか。

答えが得られなかったのは、問いが間違っていたからだ。

千早のそばに、一番近くに寄り添っていたプロデューサーは、自分が千早と同じく、疑いのない明瞭な答えに辿り着くことを避け続けていたのだと、今にして気づいた。

「千早――すまなかった」顔を覆って咽び泣く少女の前に、プロデューサーも膝をつく。「知ってたんだ。千早が音楽教室を巡っていること。クラスのみんなに音楽を教えるためだったんだな。けど、そのためなら、そんなことをする必要はなかったはずだよな。わざわざ音楽教室を訪ねたりして、歌織さんに教えを請わなかったのは――」

「ちがいます！　ちがいます！　ちがいます‼」滂沱と涙を流しながら、しわがれつつある声を震わせながら、千早はプロデューサーの胸ぐらを掴んでいた。「そんなことあるはずがない！　絶対にちがいます！　だって桜守さんは素敵な人で、優しい人で、みんなのお姉さんで、私も桜守さんのことが大好きで、なのに、なのに――どうして、私は……そんな桜守さんを……妬ましいと……憎いとすら……」

千早の手から力が抜ける。その掌は今、プロデューサーの胸に力なくそっと、添えられるだけになっていた。「プロデューサー、私は……誰かを好きになることすら、出来ないんですね……」

「そうじゃないよ。自分で言えたじゃないか、歌織さんのことが大好きだって」冷たい手を両手で包み込んでやる。所在なさげに震える細い指を、しっかりと握りしめてやる。「妬んだって、憎んだって、千早は歌織さんのことを、ちゃんと大好きなんだよ。

「なあ、千早。もし千早が本心からそう望むのなら、トップアイドルを目指さなくてもいい。千早がこれまで本当にがんばってきたことを、みんながちゃんと知ってる。だから、この夢追う場所で千早が夢追うことを諦めたとしても、誰も千早を追い出したりはしない。そのことは、分かってくれているよな？

「けど、けれど――このことも分かってほしい。トップアイドルを目指して、みんなとぶつかり合って、お互いに妬みや憎しみを心に抱えることがあったって、何も怖がることなんてないんだ。いや、怖いかもしれない――自分の中に、大好きなみんなを嫌いに思う気持ちが芽生えることは、怖いことかもしれない。けれど、それでも、千早がみんなのことを大好きに思う気持ちは消えたりなんてしない。みんなだって、そのことも、ちゃんと知ってる。

「忘れてしまう瞬間はあるかもしれない。憎しみどうしをぶつけ合うような瞬間が、もしかしたらこの先、確かにあるかもしれない。でも、きっと思い出す。みん

なも、千早も。お互いに大好きな仲間たちなんだってことを、たとえ忘れる瞬間があったって、絶対に、忘れたままになんてならない。

「千早、本当にすまなかった――おまえを一人にして。劇場（シアター）をホームだと言ってくれた、その言葉に甘えきっていて。この場所がホームだから、みんなが家族だから、本当は、おまえを一人になんてしちゃいけなかった。でも、これからは大丈夫だ。俺は絶対に、一瞬だってこの先、忘れることはしない。千早がみんなのことを大好きだってことも。俺が、歌を歌う千早のことを、大好きだってことも」

冷たい涙が温もりを帯びる。プロデューサー、間近でそう呼びかけられると、今さらのように照れくささが湧き起こる。「……まあ、なんだ。今日だってな、思わずあんなことをしちゃったけど。本当は満足なんてしてなかったんだぞ？　マイクを奪って一曲、披露しちまえば良かったんだ」

「それは、流石に」二人で目を合わせ、声を合わせて、笑う。涙を拭うことも忘

れて、その粒がきらきらと、夜風に舞い踊るのに任せて。「プロデューサー。私、ずっと、言えなかった言葉があるんです。今、それを言っても――？」

もちろんだ、千早。自分を偽る必要なんてない。

「――私を、トップアイドルにしてくれますか？」

もちろんだ、千早。これまでも、これからも、一緒に歩んでいこう。

6　都内某アパートの一室

薄めに入れたコーヒーに、温めたミルクを加えて。
気持ちの昂ぶる夜には、少量のカフェインが却って寝つきを良くしてくれる。
いつもは砂糖を入れたりしない。ベッドの上で炭水化物を摂るなど言語道断だ。
けれども、今夜は。特別な夜には、甘い温もりが相応しいように思えた。
特別な夜。特別な一日。
カーテンを開け放した窓から眺める、夜空と夜の街並みは、いつもと変わらない。
それが正しいのかもしれない。いつもと変わらない一日だったのかもしれない。
結局、何も変わりはしていないのだ。
私がトップアイドルを目指すことも。

プロデューサーが傍にいてくれることも。
それでもなお、傷つきながら歩んでいかねばならないことも。
それで良いのだと、千早は想う。
この世界の輝きは、すべて、打ち砕かれてある人々の光だ。
儚く小さなその光が愛する人に降り注ぐ。
そんな世界で歌うことを私は選んだのだ。
時間はあまりないのかもしれない、とも思う。
――どんな回り道をしても、夢を叶えることに遅すぎることはない。
母に、そのことを伝えるためには。
甘い温もりを喉へ落とす。
まだ微かに湯気の上るカップをサイドテーブルに置いて、体を横たえる。
そっと目を伏せると、甘い夢の世界が待っている。

誰も傷つかず、誰のことも傷つけなくてよい世界。
けれども、目覚めの時にはその世界に、きっと、さよならを告げることができる。
いつか私たちが還っていく世界に。
この冷たくて美しい世界で夢を叶えるために。
甘く温かいその夢に、今は、ひとときのさよならを。

7　劇場

C–G–C。千早がお辞儀をする。「ありがとうございました、桜守さん」

「おつかれさま、千早ちゃん」にこやかな笑みとともに、額に浮かんだわずかな汗をハンカチで拭う。「すごいわね、本当に。こんな難しい歌をあっという間に自分のものにしてしまうなんて。私、ちゃんとお役に立てているのかしら？」

「もちろんです！　桜守さんのアドバイスとピアノがなければ、一人では、とても練習になりません。本番は録音のオーケストラ伴奏だとしても、自分の歌にしていくには一緒に弾いていただかないと、とても……」それに、と言葉をつなげる。「まだまだ自分のものに出来たとは思えません。あの、お時間を頂いてしまって本当に申し訳ないのですが」

「いいのよ、千早ちゃん。これは私自身のためでもあるのだから。本番まで何回

でもレッスンしましょう」少し名残惜しそうに鍵盤を見つめてから、そっとカバーを閉じる。「最初にデモテープを聞かせてもらったときね、プロデューサーさん、随分と意地悪なことをするなって思ったの」

「いじわる、ですか？」

「だって。せっかくの千早ちゃんのセンター公演ですもの、もっと明るくて楽しい歌なら良かったのにって。きれいだけれど、なんだか冷たくて悲しい曲に感じられてしまって」椅子から立ち上がり、手にした楽譜を見つめながら、「でも、千早ちゃんからレッスンパートナーの申し出をもらって、一緒に練習を重ねていくうちに、分かったの。ああ、これはとてもあったかい歌なんだって。冷たくて凍えそうな言葉が並ぶ歌詞なのに、いいえ、だからこそかしら、寒さに震えて歩み出せない人たちに勇気を与えてくれるような、そんな歌。千早ちゃんがこの歌に込めようとしている想いに、私もしっかり寄り添いたい。そんなふうに考えて弾かせてもらっ

ているから、とても勉強になるのよ」

「桜守さん……」優しい言葉が胸に沁みいる。この歌を自分のものに、如月千早の歌にしていく、その道のりをこの人と一緒に歩んでいけることが本当に嬉しい。なのに。やはりずきりと胸が痛む。自分が得ることのできなかった、人への優しさ。歌が大好きな子どもたちと一緒に歌ってきた、桜守さんの回り道。

うらやましい。

濁りを帯びた毒が胸を蝕むことは止められない。それが輝きを曇らせることはもうないと分かっていても、誰かを好きであることに伴う苦しみは、苦しみのままだ。

「……千早ちゃん？　大丈夫？　やっぱり少し飛ばしすぎたかしら」

「あ、いえ。厳しいレッスンを希望したのは、私ですから」胸に拳をあてがったまま、そう答える。確かに息苦しさの半分は、レッスンのきつさのためであった。

だが、もう半分は、桜守さんの優しさが上面だけのものではないことそのものに起因している。

それでも、この苦しさと向き合うことに、今は恐れなどない。「あの、桜守さん」

「なあに、千早ちゃん？」

「その……良ければ少し、聞かせて欲しいんです。桜守さんが音楽教室を開いていたときのこと、を。例えば、印象に残っている生徒のこと、とか」

「もちろんいいわよ！　そう言えば、そんなお話をしたことはあまりなかったものね。そうね、印象に残っている、子の、こと……」

え。千早は短く声を漏らす。

今、胸に手を当てているのは、桜守さんの方だった。

苦しそうに、その瞳にはわずかに涙を湛えて。「桜守さん……？」

「あ。ごめんなさい。そうね、印象に残っている子――ああ、ごめんなさいね。

とても楽しい思い出がたくさんあるのだけど、そう言われて思い浮かべてしまうのは、どうしても、最後まで歌うことを好きになってくれなかった子のことばかりで」

「――あっ」

「みんな本当にいい子ばかりだったのよ。けれど、親御さんに無理強いされて通っていた子もいたわ。そんな子たちにも、少しでも、歌うことの楽しさを伝えてあげたいとがんばったけれど……そのがんばり自体が、その子たちにはきっと、重荷だったのね。中には歌うことを楽しんでくれた子もいるけれど、みんながみんな、そんなふうには――ち、千早ちゃん!?」さめざめと泣きだした千早の姿に慌てふためくように、「ああ、ごめんなさい！　こんなお話をしてしまって、でも大丈夫なのよ、辛いこともあったけれど、私は――」

「違うんです、私は……」そう。誰かのために涙を流せるほどに、私は優しく

ない。

だからこの涙は、きっと、私自身のために流す涙に違いない。

ああ。私はどれだけ幸福だったのだろう。

歌うことの楽しさを分かち合えたこと。その思い出に浸ることを許されたこと。

『忘れてしまう瞬間があるかもしれない――でもきっと思い出す』

そのとおりです、プロデューサー。私は忘れていた。

この輝きが、誰のものでもない、私だけのものだということを。

だから。だからいつか、私もこの人のようになれる。

誰かのために涙を流せる、優しい人に。

「――歌織さん」心を込めて、今初めてその名を呼ぶように、呼びかける。「時間を下さい。歌織さんの大切な時間を、私のために」

そしていつか聞いて欲しい。私の物語を。傷ついてきたあなたと、あなたが傷つ

けてきたすべての人のために、心から歌う、私の歌を。

（了）

どらこ爆発・著
website：劇場《シアター》怪文書叢書編纂室
e-mail：vkdrako@gmail.com